

第12部会

第十二部会

瓦に見る水のモチーフ

春日井 眞英

「瓦」といえば、一般的には鬼瓦であり、鵜尾（シビ）やシヤチホコの代名詞と言っている。しかし、瓦には様々な意匠が隠されている。そこに注目すれば、数多くの象徴性を見ることができる。この象徴性は、瓦だけに限らず建物全体にまで及んでいく。それは、屋根が寄り合う妻という部分にまで及ぶと言っている。寺や、大きな家では妻の部分に木造の飾りがあり、それが「懸魚（ケギョ）」と呼ばれることを考えても、「魚」の意匠が建物の飾りに関係してくることは興味深い。ここにも火伏せの呪術があるといわれている。鵜尾や鯢のように「魚」形の瓦が屋根の上に載せられるようになった年代の問題はここでは考えない。ただ、愛知県陶磁資料館所蔵の明器（葬儀の副葬品）を見る限り、漢の時代にまで遡ることが伺える。ここでは魚などのその象徴性に視点をあてて、現代日本に見る民家の瓦の意匠に視点を置いて考えてみたい。

寺社などでは、よく屋根の上に唐獅子や牡丹の花。そして菊の花を見ることができる。だが、この菊の花もよく観察すれば、その根元には水の流れている水紋を見ることができる。この水紋、あるいは水の字などから通常、この種の瓦には「火伏

せ」の呪術がなされていると解釈されているようだが、著者は「火伏せ」以外の見方がここに存在するのではないかと考えている。それを紐解く手がかりが、先ほど触れた「懸魚」や「魚」形の瓦であると考えている。もちろん、一般民家に「魚形」の瓦を見ることができ、最近では極めて希であるが、愛知、岐阜、三重また京都府などでも容易に見ることができる。この、古い形式がシビであり、またシヤチであろうということは容易に理解できる。ただ、この魚が導く先が何処になるのかが大きな問題である。それは、マカラなどにも通じる可能性があり、インドなど文化的な広がりを感じさせるからである。

この種の水を主題とした瓦の意味するものが何かという事は、まだわからない。しかし記紀などを検討してみると水という問題はとても奥深いものであることがわかる。橘小門での伊邪那岐の禊ぎを契機とする神生みだけでなく日本文化を考える上で水、あるいは海が重要な鍵となるかも知れない。

この瓦の意匠に地域性があるのか否かはまだ充分に検討できていないが、象徴として理解できるのではないかと思慮している。